令和七年度　大阪府実技検査問題　（特別入学者選抜）　朗　読

次の文章は、登場人物たちが出場した俳句甲子園の地方大会決勝戦の数日後の場面である。この文章を朗読しなさい。

「ねえ、航太、覚えてる？　あんたが地方大会の決勝戦に作った句」
突然だったが、航太は素直に答えた。
「もちろん覚えてるけど？」

今ここがおれのポジション南風吹く

これが、航太の句だ。試合には使われなかったけど。
「だけど今頃、なんで？」
「『今ここがおれのポジション南風吹く』」
日向子は航太の問いには答えず、そう吟じてみせた。
「みんなで話し合って、義貞先生にも意見してもらって、結局航太のこの句、試合には使わないことにしたんだよね」
「うん」
それで当たり前だと思った。自分への迷いを詠んだ日向子の句や、島の高みから見た海を感じさせる和彦の句に比べたら、なんと言うか、幼稚な感じなのは自分でもわかっていたから。
「だけど、あの句、妙に心に残りはしたんだよな」
恵一が、反対側からそう口を挟んだ。「『おれのポジション』って言い方は、たしかにあんまり俳句らしくはないし、『今ここ』っていうのも、なんか、Ｊ－ＰＯＰあたりで使い古されたベタな感じがする。だけど、これを聞いた時、ぱっと、バスケットコートの中でポイントガードを務めている航太の姿が浮かんで、ああ、いいなと思ったのは本当だ。だから迷ったんだが……。あと、正直、審査員にどう評価されるか、読みにくい句だとも思ったしな」
日向子が体を乗り出した。
「うん、そう！　私も、この句は残ったんだよ！　絶対に汗びっしょりかいて大声出して、気持ちよさそうに走ってるんだろうな航太、ってそこまでひとつづきの景が浮かんだの。恵一の言うとおり安全策を取って、使わずに終わっちゃったけどね。でも、わからないよ？　試合に出したら審査員にすっごい評価してもらえたかもしれないよ？」
二人が口々に言ってくれるのを聞いていると、航太はこそばゆくなってくる。
「あ、つまり二人とも褒めてくれてるんだと思うけどさ……、でもあれも、ほかに何も浮かばなくて、ただ屋上に立って南風南風、って風を感じようとしていた時に、ああおれ今ここで生きてるんだって、そういうのをふっと感じただけで」
「それがいいの。今ここがおれのいる場所、そう言い切る単純さが航太のいいところじゃない」
そう言った日向子は、まっすぐ航太を見つめた。

森谷明子『南風吹く』／光文社